

○春日 綾 大村知子 (静岡大)

【目的】本研究は、2000年1月に交通事故により視覚を完全に失った受傷者が、生活活動復帰への訓練過程において遭遇したバリアに関する事例報告に基づく。本報告では、衣生活行動におけるバリアフリーへの試みや政策への提言、バリアフリーに関する教育課題や障害の疑似体験授業の方法など、家庭科教育に資することを目的に考察を試みる。

【方法】事例報告の対象者は、本学会にも研究発表業績を有し、家庭科教育に関する基礎知識と経験をもち、一瞬にして視覚と嗅覚を失った者である。資料は、障害者としての生活復帰プロセスにおけるバリア体験を受傷者が生活科学の視点から記録していた資料およびその後の聞き取りによる調査資料と実践の記録である。今回は衣生活行動とそれらに関わる情報の受容とコミュニケーションに関してのバリアについて報告する。

【結果】中途失明者にとって、衣服構造の判別や着脱では時間をかければクリアし易いが、コーディネートの自立は極めて困難で、装うということは日常的な欲求であり、ストレスの一因になりやすい。管理においては、糸印を付ける工夫により個別に判別でき、自己管理が可能になるとともに洗濯などの家事参加ができて、家族との共同生活の適応や生活意欲も増した。製作の試みでは、失明以前の児童期の編み物学習の経験が有効に作用した。

本研究の一部は静岡県「しずおかユニバーサルデザイン研究」の助成によった。